

すきなあの人の

神戸遥真
令丈ヒロ子
少年アヤ
こまつあやこ

絵
いつか

君色パレット

多様性をみつめる
ショートストーリー

PALETTES OF YOUR COLORS

もくじ



おばあちゃんおばあちゃんの恋人こいびと

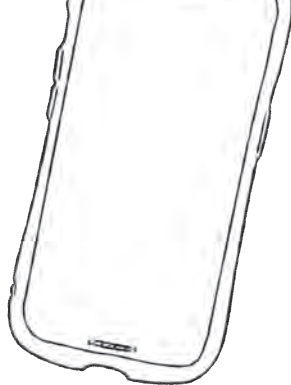
こまつあやこ

119

クリイミクリイミじゃない
鳥トリのはなし

少年アヤ

93



最高のカノジョ

令丈ヒロ子

47

わたしのホワイト

神戸遥真

7





四

走って走って走って、逃げるように『ニコアス』から自宅に帰った。

「おかえりー」

リビングからお母さんの声がしたけど、こたえず階段を駆けのぼり、自室に飛びこんだ。

机の上に置いてあった、《P×P》のライトブルーのペンポーチ。それをつかみ、床に放ってあったコンビニの袋をひろげて押しこんだ。ほかにも、机のなかにしまっていた濃いパープルのシャープペンシル、すみれ色のマスキングテープ、色んなものをつつこんで、最後は袋の口をぎゅっとしぼる。そのまま、机の一番下の引き出しの奥に押しこめた。悲しくて悔しくて、気がつけば視界がゆらゆら動き、やがてポロリとこぼれ落ちる。

わたしのなかにあった、特別が、ポロポロになっちゃった。

柊木さんはカッコいい。運動も勉強もできる。それは事実だ。

でも、わたしが求めていたのは、唯一無二の特別だった。

てくれるので、特に問題はない。

ぼくは冷蔵庫からよく冷えた炭酸飲料のボトルを一本取り、自分の部屋に行く。制服の上着をぬぐと、座ってスマホを手にした。

中二になってすぐ、おじいちゃんがプレゼントしてくれた、最新のタイプのやつだ。

「Heyイリ。やっと帰って来られたよ！」

そうよびかけると、スマホの画面にかわいい虹色の球体が、ぼんと現れた。

「ユウ。おつかれさまでした」

球をゆらゆらさせて、イリがやわらかな声で返事する。

「イリ、今のぼくの気分、わかる？」

「ユウの気分？ 今日もだれかに告白されて、断るのが、めんどくさかったなああってところですか？」

おちゃめな返事に、ぼくは飲んでいたライムソーダを吹きだしそうになった。

「さすがイリ！ その通りだよ。キミはなんて優秀なバーチャルアシスタントなんだ」



「え、あ、おはようございます」

当たり前だけど、銀之助はぼくに気づかなかった。鳥はここにいるのに。これがほんとの鳥なのに！

その瞬間、ぼくは、とうとう花のまんなかたどりついた。そこに現れたのは、そのまんなの自分だった。ぱっとしない、すてきじゃない、女の子でも男の子でもない鳥のすがただった。

そうだ。ぼくは、鳥がかわいそうでたまらないんだ。銀之助が褒めてくれるたびに、すきだと示してくれるたびに、奥のほうに沈められていく鳥自身がかなしいんだ。すてきじゃない自分が、なにでもない自分が、泣いているのを感じるんだ。

変身してつかれるのも、そのせいだ。鳥が、鳥がいかないでって、一日じゅう泣いているんだ。ぼくはその声を、聞かないふりしてたんだ。

銀之助だけじゃない。つるそうも、ほかのみんなもずるい。どうしてみんな、魔法をつかわないでいられるの。そのまんまで、いられるの。

すっかり追い抜いてから振り向くと、銀之助はのんきに桜を見上げていた。ねえ銀之助、鳥がとなりにいなくてさみしくないの。どうして気づいてくれなかったの。

